

新学長に河田悌一 文部教授

9月10日 学長選挙会で選出

永田直二学長の任期満了に伴う次期学長選挙が9月10日に行われ、河田悌一文部教授が第二十八代学長に選出された。

今回の学長選挙については、まず九月十日、各学部長及び外国語教育研究機構長が選挙管理委員会となり、学長選挙管理委員会が構成された。続いて、七月一日に学長選挙日程が発表され、七月九日に教育職員、事務職員から選出された候補者が確定し、公示された。最終的に学長を選出する学長選挙会は、九月十日、全教育職員によって行われた。選挙権者は、同規程第九條第四項の定めに基づき、現職かつ専任の教授、助教授、専任講師、助手及び副手で、当日の投票総数は四九一票であった。



河田悌一学長 略歴

昭和二十年京都生まれ。
昭和四十二年大阪外国語大学中国語学科卒業、昭和四十七年大阪大学大学院文学研究科博士課程所定単位修得後退学。
昭和四十七年和歌山大学助手、助教を経て、昭和六十二年関西大学文学部教授。
平成十一年四月から十五年九月まで副学長を務めた。専門は、中国思想史。

新学長プロフィール

「開大ルネサンス」の実現を願う

現在、大学は激動の時代を迎え、乱世の真っ只中にある。受験生が右肩上がり、の時代と異なり、少子化、設置基準の大綱化、経済不況、COEやCOLの外部評価、国立大学の独立行政法人化の影響など、熾烈な競争にさらされている。そのなかで学長職を引き受けるのは、誰しも躊躇せざるを得ない。うまく舵取りをして当たり前、万一それを誤るとたちまち、厳しい批判の槍玉にあげられるからだ。

河田新学長は、文学部長や副学長での実績が示すように、独断専行するのではなく、多くの人の意見や提案に耳を傾け、決断を下すタイプであるが、いかに学長として必要な配りやリーダーシップを併せ持つ人物であり、この周到さと決断力は、変革に不可欠なものである。真の意味における「開大ルネサンス」の実現を期待する。
(文学部教授 浜本 隆志)



以文館が竣工

平成十四年九月より工事が行われていた以文館の竣工式が、九月二十四日(水)午前十一時から挙行され、大がけで行われた竣工式には、学及び工事関係者のほか来賓を含め約百三十人が出席し、建物の完成を祝った。

本館は、約三〇〇〇㎡の延床面積を有する以文館は、各階に本格的な法学教育を行うための施設として位置づけられ、一階北側には、社会科学的研究機関や学部・学科の名称などにも、最近ではカタカナを入れることが流行している。国際化の時代において、日本語を話し日本語で書くことはもはや許されぬことなのだろうか。
(伊藤 淳志)

Table listing new appointments for various university departments including Law, Economics, and Education.

新役職者決まる

Table listing new appointments for various university departments including Law, Economics, and Education.

HEADLINE

- 2 面 新役職者紹介
- 3 面 アリゾナ大が協定大学に
- 4・5 面 特集「秋は学ぼう」宣言
- 7 面 秋の人権啓発行事 横田さん夫妻が講演
- 8 面 特集 撮りつても開大!



先日、国立国語研究所による「外来語」の言い換え提案が新聞で報道されていた。正直言ってみれば、正言正語で理解したいが、言葉ももんでいた。意識して新聞や雑誌、街中の看板や電車の広告などを眺めると、いかにカタカナやアルファベットの文字の多いことが、まさに日本語を否定するかのときどき氾濫している。世はまさに国際化いやグローバル化の時代であり、国際的な活動のための手段として英語を修得することは必要である。ところが、日本国内での会話や文章においては必ずしも英語を使う必要はないはずである。逆に日本の文化や伝統を重んじようとするならば、あえて日本語を使うことが大事ではなからうか。カタカナ言葉を使うことが、新しいことあるいは進んでいることと錯覚している嫌いがあつた。また、全学共通の施設としての位置づけから、一階北側には、社会科学的研究機関や学部・学科の名称などにも、最近ではカタカナを入れることが流行している。国際化の時代において、日本語を話し日本語で書くことはもはや許されぬことなのだろうか。
(伊藤 淳志)